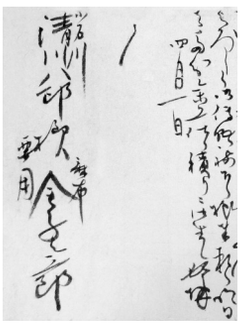
第1回〝上山ふるさと散歩〟2025年２月22日（土）PM2:00-3:30 上山市立図書館視聴覚室
配布資料／文中敬称略：文責・岩井哲

【清川八郎】について

1830（天保元）年 10 月 10 日、出羽国田川郡清川村（山形県東田川郡庄内町）の郷士斎藤豪寿（ひでとし）と亀代の長男として生まれる。斎藤家は庄内一の醸造石数を誇る酒屋であった。**本名は斎藤正明（幼名は元司）で、のち清川八郎と改名**、同志の間では「川より大きい河が相応しい」として清河八郎として流布？



1855（安政２）年 25 歳、３月から半年かけ、母親を連れ、善光寺、伊勢、京都、近江、大坂、天橋立、江戸、日光などを巡り『西遊草』をまとめている。

「もとより道路や村里の遠近を記したものではない。人の心や世の有様、または天下の形勢に重点を置いて記したものだから、他の人の記した紀行とは少しく趣を異にしている。」このようにわざわざ物見遊山の旅ではないことを自註している。

文久３(1863)年４月13日、**上山藩江戸上屋敷付近一之橋において暗殺**され、34 年の生涯を閉じる。庄内町の清河神社に祀られている。

《重要と思えるエピソード》

八郎（斎藤正明）にとって生涯を決する転機となったのが、1846（弘化３）年、斎藤家を訪れて逗留した旅の**絵師・竹洲（ちくしゅう）との出会い**。竹洲は江戸や京都の様子を 17 歳の素朴で人一倍多感な八郎に話す。加えて、1840（天保 11）年清国がイギリスに侵略されたアヘン戦争のこと、西欧列強が次に日本を狙っていることなども伝える。竹洲の本名は備前岡山藩士・藤本津之助（鉄石）。後に**天誅組*の総裁の一人**となる人物。　　*天誅組；幕末に公卿中山忠光を主将に志士たちで構成された尊皇攘夷派の武装集団。

清川の思想と信念＝尊皇攘夷

1860（安政７）年２月（「桜田門外の変」の１ヶ月前）、清川八郎 30 歳。**『虎尾の会』を結成**。総勢 15 名。《幕府が進めているわが国の近代化＝海外との積極的な交易＝を阻止するためなら、虎の尾を踏む危険も恐れない》という意味がこめられていたという。1861（万延元）年 12月４日、米国公使館通訳のヒュースケンを襲った事件は『虎尾の会』メンバー（薩摩藩士伊牟田尚平ら）によるもの。ヒュースケンは翌５日死去。

目的は攘夷決行▶外国人を日本から追い払い、天皇を中心に日本をひとつにまとめて事に当たるというものだった＝国粋思想に近い排外主義。

1863（文久３）年２月 23 日、将軍・徳川家茂の上洛に際して幕府を欺き、警護部隊として各地から人材を集め、浪士組を結成。清川八郎は 33 歳。盟主として一隊を率いて京都へ出発。ところが、京都に到着した夜、清川八郎は突如浪士を壬生（みぶ）の新徳寺（山号は鳳翔山）本堂に集め、「本当の目的は将軍警護などではなく尊王攘夷の先鋒となることにある」と宣言。

浪士組の分裂へと繋がって行く▶清川八郎の考えに与しない浪士たちは京都に残り後に京都守護職の任にあった松平容保（会津藩主）に仕え新選組となる。江戸に戻った浪士組も新徴組へと改組されていく。

江戸横浜焼き打ち計画の背景

当時幕府は、1862（文久２）年８月 21 日に起きた生麦事件（薩摩の島津久光が江戸からの帰国途中、生麦村［現横浜市鶴見区］を通過の際、行列に馬で乗り入れた上海のイギリス商人Ｃ.Ｌ. リチャードソンら４人を殺傷）の代償をめぐるイギリスからの強硬な要求を持て余していた。

① 島津久光を引き渡す　② 賠償金を差し出す　いずれかが実行されない場合は軍艦を差し向ける、というものだった。幕府とイギリスの交渉が本格化するのは 1863（文久３）年２月１９日からであった。

これを聞いた清川八郎は、朝廷に破約攘夷（生麦賠償金拒絶による開戦）の建白書を上奏。

八郎は、同年３月、関東へ戻る旨を浪士組全員に報告するための集会を企画し、「この度、生麦事件で

英国は強硬な談判をはじめ、次第によっては軍艦を差し向けるとまで脅迫している。我等もとより異人を払う急先鋒にと存ずるにより、まず横浜に参って鎖国の実をあげ、攘夷の先駆けをいたさん所存である」

このように、横浜での攘夷決行を促している。これが清川八郎暗殺への起点となったと考えられる。

攘夷を叫ぶ浪士たちにはもともと海外列強の国力・火力・兵力についての認識は希薄であった。

清川八郎、江戸へ

幕府は京都における清川・浪士組の動きを警戒。清川八郎に率いられた浪士組本隊（160 名）は 1863（文久３）年３月 13 日に京都を出発。中仙道を通って同月 28 日江戸への帰還（東帰）を果たす。

攘夷決行の予兆など

清川八郎の横浜・江戸の焼き討ちという攘夷決行の予兆と実際。３月 29 日、江戸町内高札所に開国派役人の政策を糾弾し、攘夷を促す張紙が発見されている。　（『官武通紀』玉蟲左太夫編より）

これは攘夷派浪士たちの仕業には違いないが、外国人殺傷を主目的としていた過激な清川たちのグループ内別動隊と考えられる。

開国派リーダーとして幕府中枢にいた小栗忠順（旗本、近代化政策を推し進めた人物、当時の役職：勘定奉行兼歩兵奉行）の屋敷（現在の駿河台明治大学付近）をも襲撃する計画であった。

決行日は1863（文久 3）年4月13 日（清川八郎暗殺の当日ということになり、**金子の山田安五郎宛書状＊**が書かれる約１ヶ月半前）。小栗邸襲撃は結局は未遂に終わるが、 部下に命じていたと資料にはある。（『小栗忠順のすべて』新人物往来社刊「小栗忠順年譜」より）＊山田安五郎宛書状については後述。

清川八郎の攘夷決行プラン

横浜の外国人屋敷を焼き払い、逃げる外国人を誅殺し、わが国から一人残らず外国人を追い払う計画。（子母澤寛「新選組始末記」より）清川は同士とともにかけずり回り、連判状への署名を集めた。（金子与三郎訪問もその一環であったという説あり）

また、横浜攘夷では、同胞･石坂周造らが近在の豪商に金策をし、爆裂弾を中心とする兵器も製造、伝馬船（てんません）・梯子等も秘密裏に準備を整えた。4 月 10 日、清川は若者数人を連れて横浜に行き下調べをし、翌日江戸に戻り、同志一同を前に宣言。4 月 15 日を攘夷決行の日とする。

幕府と清川八郎、東帰浪士の間に緊張が高まり、八郎のもとに続々と参集する浪士たちが八郎の手先として働くことを危惧し、幕府はさらに警戒を強めることになる。

清川暗殺指令

清川の動きはすでに幕府に察知されていた。くわえて浪士組を私物化しようとした前科が清川にはあった。幕府は清川をマーク。わが国近代化に向け海外との交易拡大政策をすすめている幕府としては、ここで外国と騒ぎを起こされては第２の生麦事件になってしまう（老中格の小笠原長行が 2 月 19 日からのイギリス代理公使ジョン・ニールと生麦賠償金交渉で帰府したばかりで神経を尖らせていた）。なんとしても清川の暴発を阻止しなくてはならない状況にあった。

宮内省蔵版『修補殉難録稿』（マツノ書店復刻）をみると刺客は佐々木只三郎、速水又四郎、高久安二郎、久保田（窪田）千太郎・中山周助・家永某（徳永昇？）の６人。

暗殺直前のエピソード

1863（文久３）年 4 月 13 日、清川八郎は居候していた山岡鉄太郎（鉄舟）宅を出て、約束の金子宅を訪問する前、高橋泥舟宅に立ち寄り次のような和歌を詠んでいる。

魁がけてまたさきがけん死出の山　まよいはせまじ 皇の道

泥舟は、辞世のようで不吉であると感じ、風邪もひいているので、金子に会うのはやめるよう言い残して登城していった。残された八郎が泥舟の妻と雑談をしているところへ、山岡鉄舟の妻と妹がやってくると、八郎は白扇を３本求め、それぞれに同じ和歌をしたためる。

清川八郎暗殺事件とは…

1863（文久３年）４月 15 日、横浜を襲撃し、攘夷決行と倒幕への狼煙をあげようとしていた清川八郎。しかし、その矢先の**４月 13 日、風邪気味だった清川八郎は、約束していた麻布にある上山藩上屋敷に金子与三郎を訪ねた。**酒を酌み交わし歓談をした後、すすめられた駕籠を断り、千鳥足で藩邸を出たのは夕七ツ（午後４時）頃、まださほど暗くはなかったという。

歓談での話題はもっぱら江戸ならびに横浜焼き打ち計画の件。

金子は清川に実行を断念するよう説得したとされている。そして２人の話は決裂。（根拠になった史料を小生は知らない）

藩邸から出てすぐの一之橋を清川が渡り切ったあたりで「清川先生ですね」と呼ばれ、見ると**佐々木只三郎と速水又四郎**がいた。佐々木が、かぶっていた笠をとり丁寧におじぎをしたので、清川も応えて陣笠をとったところ、後ろから頭を**斬られた**。享年 34。

清川は自分の攘夷決行を支持している**「500 人の連判帳」**を持っていたとする虎尾の会同志・石坂周造の説もあるが、暗殺現場で所持品を検証した結果、事実は異なっていたようである。

仙台藩士玉蟲左大夫が編纂した『官武通紀』によれば、事実は下記のようである。

「八郎は、たしかに連判帳らしきものを懐中にしていた。だがそこに**記録されている姓名はわずか 28 名**。その 28 名の名簿を《取上、直ちに御目付へ訴訟仕候者有之、夫より俄に御吟味》となって、翌 14 日に記載人物が吟味対象になった」と記している。

清川八郎暗殺と金子与三郎

金子与三郎関与説は、史談会での増戸武兵衛の証言がその根底にあり、それをもとにして著された大川周明の「清河八郎」によって一般化されるという流れがあったと考えられる。だがその前に……。

元浪士組中村維隆（これたか）の史談会での証言

一般的に清川八郎暗殺への金子清邦関与説は史談会における増戸武兵衛の証言（明治 37 年）とされているが、じつはそれよりも先に元浪士組中村維隆（これたか）の同会での証言（明治 36 年３月）で既に語られていた。

つまり暗殺の直後から金子関与の疑惑は確信をともなった状況で流布されていたようである。くわえて**中村たち浪士組有志は当時《金子を疑い尾け狙った》が、金子は江戸から離れていて復讐できなかったという内容のことさえ証言**している。

▶金子の所在を年表で見ると、当時視察の名目で越後の支領にいたようで中村の証言と矛盾しないと考えられる。上山藩の越後領は三島郡内に 31 村、刈羽郡内に 21 村があり、越後領の石高は上山藩全体の約４割（つまり１万２千石）を占めていた。

《参考》長南伸治氏「近代における旧上山藩士金子清邦像形成に関する一考察」

増戸武兵衛の証言（史談会）要約

自分はその日は藩主らと打球に興じていて、昼食後からは酒宴だった。そこに藩邸近くで殺しがあったとの知らせが入り、現場に駆け付けると清川八郎が倒れていた。

金子と親しかったので金子に知らせると、先程まで会って話をしていたという。そして金子はじつに残念だと言った。

事件の一ヶ月程前、金子が閣老小笠原長行に会いに行くというので連れて行ってもらった。だが閣老はまだ殿中より帰らず、小笠原の重役の多賀隼人を訪ねた。金子の用向は小笠原の義理の妹直子を当藩主（松平信庸）の奥方に貰うという打ち合わせであった。

雑談に入ると、金子が言うに、実は清川八郎を暗殺しようという者もあるが、どういうものかと問うた。多賀は一寸考えて、至極よかろうと答えた。金子が、人は暗殺といえば西国か水戸のものでもなければ出来ないことのように思っているが、幕府の御家人だそうですと、多賀を喜ばしむるような語気にとれた。

事件の翌日中村平助（上山藩士）から聞いたのだが、上山藩上屋敷裏門前にある茶屋の女が、事件の前、清川を待っている３人の男を見たと言っていると。

そのひとりはその話の内容から佐々木只三郎でることがわかった。

佐々木只三郎は会津藩手代木直右衛門の弟で、金子は手代木直右衛門と親しい仲にあったことから、佐々木只三郎とも親しい間柄にあった可能性があると考えた。

上山藩士増戸武兵衛の談話（史談会速記録 第 144 輯掲載）

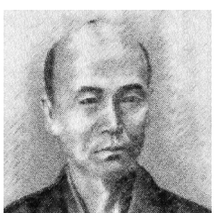
清川八郎暗殺に関する通説

さらに、大川周明『清河八郎』（昭和 12 年・行地社出版部）によって広められたと考えられる。

大川周明の著書『清河八郎』より

金子が八郎の謀殺に与っていたとする第一の証拠は、上山藩士増戸武兵衛の談話（史談会速記録 第 144 輯掲載）で明らかである。…中略…。八郎が暗殺された２・３日後、八郎の弟斎藤熊三郎が、清川八郎が金子に預けて置いた著述物を金子宅に受け取りに行った。そのときの話によれば、金子に会ったら兄の仇を討つ積りで、決死の覚悟を抱いて出かけた。金子宅に着いて名を通じると、暫く待たせた上で客間に案内された。入ると金子の左右には壮士数名が並んで守護している。そんな訳で刀を抜くこともできず、只著述物の入っている行李だけを受け取り、無念の涙を呑んで帰ったという。

金子には、たとえ勤王攘夷の志はあったとしても、断じて討幕の精神はない。彼は八郎に討幕の志があるのを知り、且つ攘夷決行の企図を打明けられ、幕府のために説得されて謀殺に加わったものらしい。当時の人も皆、金子が関係しているものと信じて疑わなかった。



【金子与三郎】について

1823（文政 6）年生まれ。出羽上山藩藩士。昌平黌に学び帰藩後藩校明新館の都講となる。いっとき脱藩を試みるなど、攘夷派志士たちとの交流も多かったことが、現存する金子宛の書状の解読などを通し徐々にではあるがあらたな金子与三郎像も明らかになりつつある。藤田東湖を介し水戸藩主徳川斉昭へ海防論「杞憂臆策」を献策、幕府の海外との交易拡大政策には批判的であった。1860（万延元）年、藩の側用人となり以後産業振興・文武奨励・洋式軍隊の整備等、積極的な藩政改革を行なった。幕命で薩摩藩邸焼討事件に出役。1867（慶応 3）年 12 月 26 日死去。享年 45。

金子与三郎のイメージは？－⑴（頌徳碑再建委員会発起人／羽島金三郎 評）

「私がまだ幼少の頃、度々父から聞かされた事がある。上山には金子先生といふ偉い人物があつた。先生は粗服をまとい、質素を旨とし、少しも身なりを飾らず、且豪膽な人で、危険な人物に應待する場合でも少しも恐るゝ事なく、身に寸鉄を帯びず、煙管一本を手に持ち、辯論を以て説服せしめたのである。…中略…先生は天下の偉い人々と親交があり、日本の国難を救ふ事に奔走して居つたのに、中途不慮の災で逝去された事は、国の為に残念な事であつた。先生は大臣級の人物だから、生きて居られたならば、奥羽戦争も起こらず、東北の人々が惨めな敗戦で薩長の人々に踏みにじられる事もなかったのだと語つて居つた。以上は私の父が只児童にも分る程度の事柄丈を話して呉れたので、先生の面影のほんの一部に過ぎないが、今でも私の脳裡に深く刻まれて居る。以下略」

（『金子得処先生』序文より／昭和 32 年 6 月 30 日発行）

金子与三郎のイメージは？－⑵（上山郷土史研究会代表／佐竹徳太郎 評）

佐竹徳太郎氏の「金子清邦（与三郎）先生略伝」（「むすび」より上山郷土史研究会刊／平成 9 年 12 月発行）は、これまで私たちが抱いて来た「金子与三郎像」の原イメージになっているように思われる。

「金子先生は幕末の内外共に多難な時代にあって、上山藩の要職を歴任され、教育の振興をはかって人材の育成につとめ、藩政の刷新を断行して、財政の危機を克服し、産業の発展、軍備の充実、領民の生活安定をはかる等、かつて例を見ない業績を挙げられた。又、杞憂臆策や意見の具申を重ねて幕府の要路者（重臣）に反省と覚醒とを促す等、幕政改革の上にも貢献された。更に紛糾する国論に対し、純正な公武

合体論を提唱して大義名分を明らかにし、多くの志士を啓蒙する等、その活躍はめざましいものがあった。この様に、多方面にわたり、偉大な業績を重ねられた先生こそ我が郷土の誇りとする偉人である。」

以上、決して否定すべき内容ではないが…聖人君子的イメージに収斂させてしまうのは「金子与三郎」の全体像を捉えるうえで、あまりにも平板で綺麗すぎるのではないか。激動期を生きた生々しい士の姿が捨象されているように思えてならない。このイメージからこぼれ落ちている金子与三郎もまた金子与三郎にほかならない。そこにも目を向けてこそ全体的なイメージになる。

一般的に、清川八郎暗殺に金子与三郎が関わっているとみられているが、果たしてどうだろう？

関与説の主たる論拠は…前述したように「増戸武兵衛」の史談会における証言。

しかしこれはどう読んでも**状況証拠のみ**で、しかも**後に金子の口から直接増戸は聞いたと言っている**が、かりに幕府からの密命を受けて金子が手招きしたのであれば３つの点で疑問が残る。

1. 密命を他言する事自体、士道としてありえないと考えられる。

1. 金子与三郎は当時の幕府の政策に対してに不満を持っていた。

1. 金子が出した山田安五郎への手紙を文体に留意しながら読んでみると、これまで語られて来た金子のイメージと違い、激情的で清川八郎の攘夷思想と酷似なものとしてあることがわかる。

交流の深さからも関与は疑問！

「この末、国家のためいかがに相成り候も計り難く候間、荷物等は残らず山岡および高橋に預けおき申し候。**著述ものは羽州上ノ山城主、松平山城守御守、金子与三郎に預けおき候間、上ノ山官庫に収めおくはずに御座候。**すべてかく多端に相成り、何事も細事にかかわりかね候間、死してのち論定まるべく、今に至ってさらに余念これなく候。以下略」宮内省蔵版『修補 殉難録稿』（マツノ書店復刻）

これは清川八郎（斎藤正明）が４月 12 日、つまり金子の屋敷を訪れる前日、山岡鉄舟宅で書いた父母宛の手紙の一部である。「斎藤治兵衛様　母公様」と記されている。母の名は亀代。

読めば読むほど遺書のような手紙である。

金子宅を訪問した際、清川は刀２本を差出し、金子の長子弋蔵と家老山村縫殿助の息子山村求馬に、形見として託している。

『官武通紀』にこんな記述が…

『官武通紀』（仙台藩士玉蟲左太夫が、文久 2～元治元年の主な事件に関する公私記録文を編纂したもの）には、注目すべき記述がある。添え書きのように小さい文字になっているのだが、以下のような文言である。

「金子與三郎其説を承り驚愕、篤と説得仕候得共、更に聞入不申由」

つまり、金子与三郎は清川八郎が暗殺されたという一報に驚愕し、「ばかな、そんなことはありえない」と否定し、誰かが「いや風体その他から間違いない」と説得しても、まだ「信じられない」と聞入れようとしない金子の様子が記されている。

金子与三郎は、清川八郎の暗殺に果たして関与していたのだろうか？

この問題（関与説）にアプローチしている研究は多く存在しているが、肝腎要の金子与三郎のことばに拘泥して論じているものは何故か少ない。

現場の状況証拠のみでは明らかにはなるまいと思われる。それを解くためには、何より金子与三郎の思想（ことば）に深く分け入ってみる必要があるのではないか。

金子与三郎の攘夷思想「杞憂臆策」はどんな建言か？

基本的には幕府の弱腰対外政策への批判。富国強兵政策の徹底。

海防思想の開陳と、具体的な攘夷のための砲台建設の提言など。

天皇を中心として、朝廷と幕府が一体となった政体、つまり公武合体を説くが、尊皇の色彩が強く（幕政批判）、むしろ吉田松陰等の考え方との類似を指摘する説もある。

将軍自ら諸侯を率いて天皇の前に参内すべきことを主張。
農兵を組織すべきことを主張。
金子与三郎が徳川斉昭への建白書を託した**水戸藩の藤田東湖**は、水戸学（国学）をとおして、自藩の天狗党のみならず、全国各地の尊王攘夷派が繰り広げた倒幕運動に多大な影響を与えた人物。
長州藩の激派勢力（木戸孝允等）への資金供与説あり。
その言動と人間関係の在りようを考えると、金子は幕府（開国による近代化）を支えようとする姿勢よりむしろ尊皇攘夷派の思想に近いものを持っていたと考えた方が自然である。

◎ 特に注目すべき書状
山田安五郎（方谷）宛 金子与三郎書状 1863（文久３）年６月２日付「拒絶の大典」。
（清川八郎暗殺の1ヶ月半後の手紙である）
浜田　　侯 含む４名３日を不出して奸を平らげるべし
酒井　飛州 含む六名 御役御免
平岡円四郎一橋公御用人。早々退くべし。
小栗豊洲・淺野伊賀守 放し打（上意打）又屠腹なり（死罪）
水野　痴雲 屠腹仰付て可然
勝麟　太郎 右大奸似忠、無由断形跡
川勝丹波守 右西洋心酔小栗党と承り候
（『上山市史編集資料 21・幕末之名士金子與三郎』118～121 頁、『上山市史・中巻』179～181 頁）
これが高潔と言われてきた金子与三郎のことばかと疑いたくなる。
表現の激しさにまず驚かされる。

金子書状で糾弾されている面々
金子が名を挙げた面々はどのような人たちか？
浜田　　侯：一年後の長州征伐で長州軍と対峙することになる浜田松平武聡（たけあきら）。
酒井　飛州：壱岐守忠行は外国奉行や神奈川奉行を歴任した幕臣。
平岡円四郎：公武合体を推進し尊皇攘夷派に睨まれていた人物。
小栗　豊洲：小栗忠順は開国派のリーダー。
清川八郎が部下に命じて襲撃しようとしていた人物。
淺野伊賀守：大目付兼神奈川奉行。
水野　痴雲（筑後守忠徳）：外国奉行の職を解かれた開国派の武闘派で、考え方は小栗に近い。
尊攘運動の抑制を画策。
勝　麟太郎：周知、海舟。松平春嶽同様あまり立場を明確にしない。
川勝丹波守：小栗同様開国派の旗本。
金子与三郎が糾弾している人物たちは、総じて幕府の要人で、海外との交易拡大を推進している人たちである。金子の思想を考える上で極めて重要と考えられる。

《参考資料》
幕府官僚たちが一致して考えていたことは、勝てない戦争はやってはならぬということであった。**攘夷派は逆に、勝てない戦であっても夷狄を神国に入れてはならぬという精神論しか持ち合せていなかった。**…中略…激しく攘夷を主張した薩摩・長州という歴史的な反徳川勢力は、裏ではイギリスと気脈を通じながら、「尊皇」という時代の気分に乗って、その「皇」であるはずの**天皇を政治的な道具として利用**しつつ、ひたすら幕府の足を引っ張った。彼らが「尊皇攘夷」の実践として京で繰り広げた反幕行動としての殺戮は、どうみてもテロリズムと断じざるを得ない。
原田伊織『官賊と幕臣たち～列強の日本侵略を防いだ徳川テクノクラート～』

金子与三郎に激しく糾弾されていた開明派幕臣のひとりたとえば小栗忠順とは如何なる人物か？

日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節団派遣された 77 人の中心人物

近代工業の象徴的なネジを持ち帰り、わが国近代化へ向けてのモチベーションとした。

この重大な史実を、新政府下の教育はいっさい伝えていない。

幕臣・小栗忠順の業績

横須賀製鉄所建設の断行（▶富岡製糸所建設へと継承）／日本最初のフランス語学校設立（横浜）

フランス式陸軍制度の採用、訓練（伝習隊の創設）／鉄鉱山の開発　中小坂鉄山（下仁田町）など

日本最初の株式会社組織「兵庫商社」を設立／水洗トイレ付きの築地ホテル建設／ガス灯設置の提唱

金札発行など金融経済の立て直し／郡県制度の提唱（▶明治新政府「廃藩置県」の素案とする）

森林保護の提唱／江戸ー横浜間に鉄道建設の提唱／新聞発行を提唱／書信館（郵便制度）創設の提唱

◎たとえば…築地ホテルの建設。

小栗忠順は、「民間でこれを行なうものがあれば土地は幕府が無償で提供し、利益は経営者のものとしてよい。資金は民間から資本を募り、利益を出資金に応じて分配する」とした。これに応じたのが、清水組（現在の清水建設）の二代清水喜助で、工事だけでなく経営も引き受けることとなった。

1867（慶応３）年８月９日建設着手、翌年８月 10 日完成。すでに幕府は瓦解しており、完成前月の７月 17 日には江戸が東京と改められ、完成翌月の９月８日には明治と改元された。提唱した小栗忠順は完成を見ずに 1868（慶応４）年閏４月５日罪なく新政府軍に斬首されている。

近代化を推進していた幕府の要人たちを、激烈なことばで批判している金子与三郎の立ち位置は、これまで一般的に言われてきたような高潔な知識人のイメージからはみ出していると言わざるを得ない。

金子与三郎が交流した人脈

頼三樹三郎、桂小五郎、東久世通禧卿、富田鉄之輔、朽木五左衛門、美玉三平、小田切勇造、一条十郎、大槻磐渓、安井息軒、玉蟲左太夫等々。たしかにさまざまな立場にある要人たちである。

《個人的には非常に重要な推論》

吉田松陰との交流もあったのでは？

金子与三郎が脱藩を試みたのは 1852（嘉永 5）年３月４日。吉田松陰が東北への旅に出たのは 1851（嘉永４）年 12 月。吉田松陰の「東北遊日記」（日本思想大系 54：『吉田松陰』岩波書店）をみると、1852（嘉永５）年３月 19 日、仙台藩校養賢堂において上山藩士森本友弥に会い、のみならず翌 20 日には、わざわざ森本と一緒に与三郎の末弟金子平策とも会っている。偶然とは考えにくい。

萩からの旅程などを考えると事前に打ち合わせていたとも思えてくる。年譜などから、金子は３月から 10 月まで脱藩未遂により謹慎の身にあったため、自ら仙台に向かうことができず、代わりに末弟の平策が兄与三郎の遣いで行動していたのではないかと推測できる。本来は直接会う事になっていたのでは…？

もう一つ重要な書状　金子与三郎へ宛てた 仙台藩士一条十郎の書状。

一条十郎とは、その文面から推測すれば仙台藩内における攘夷派の人物のようで、金子へ宛てたその文面からもそれはうかがえる。たとえば長州藩の激派勢力（高杉、久坂、伊藤博文等）によって引き起こされた英国公使館焼討ち事件について「**すばらしい行いであると一人歓喜しております**」と書いている。

思想心情を共有し、信頼し合っている相手にしかみせられない表現であり本心と読める。

このように、　山田安五郎や一条十郎との書状のやり取りをみても、金子与三郎も過激な攘夷思想の持ち主であったことが、いっそう明らかなものとなりつつある。

金子与三郎の立ち位置

1866（慶応 2）年、攘夷についての意見具申や第２次長州征伐＊反対などを幕府に提言。

状況を考えれば、幕府に対するアンチテーゼの公言を意味する。

長州征伐が孝明天皇の命令によるものであったことを考えれば、孝明天皇の意向にも反していたことになる。

金子与三郎の攘夷思想の一貫性はこれまで考えられてきた金子とはあたかも別人であるかのようだ。

同志と言っても過言ではない清川八郎の暗殺に加担する理由はどこにも見当たらない。

＊長州征伐：外国船砲撃などあまりにも過激な攘夷活動に危機感を覚えた孝明天皇(本来は外国人嫌い？)が、幕府に命じたもの。

「上山金子与三郎分外ニ出、天下之為ニ周旋する等とて、大坂ニ於面列藩江奔走致居り、却而邪魔者ニ被為候」

（栗原伸一郎著「幕末期の上山藩と奥羽諸藩―上山藩士金子与三郎の思想と行動を中心に」より）

これは上山藩が長年引き受けていた大坂加番に出役したとき（慶応２年 12 月 19 日の最後の出役）の金子与三郎の行動を会津藩士から得た話として米沢藩士宮島誠一郎が日記に書き残したものである。

つまり、穿った見方をすれば**京都守護職（会津藩ならびに新選組）からも当時金子は睨まれていた可能性がある**ことになる。

清川八郎暗殺・具体的経過

3 月 16 日、浪士組東下の途中関ヶ原宿で速水又四郎が**長州藩士某から清川八郎にあてた密書**を手に入れた。内々披(ひら)いて見ると国の大事にかかわることである。速水は急いで人を走らせ、上洛中の老中板倉周防守（勝清）に提出した。4 月 7 日、京都より、（板倉閣老が速水ら出役の者に向け）清川八郎を暗殺せよとの密命が届いた。

『官武通紀』には**「清河(ママ)八郎、切支丹にて身を隠し候由にて手取にては手に入り兼ね候間、だまし打に討ち取り候様」の内旨(ないし)**が載せてある。速水・佐々木らは早速八郎をつけ狙った。

八郎の横浜焼き討ちの計画を幕府が知ったのは４月２日である。それで**老中小笠原図書頭（長行）が、八郎の親友である上山藩儒金子与三郎に、八郎を暗殺せよとの密旨(みっし)を伝えた…とある。**

ところが…『京都見廻組秘録』（菊地明著：洋泉社／2011 年 8 月刊）に、清川八郎暗殺についての重要な記述が紹介されている。「清川暗殺は幕府より命じられたのではなく、佐々木がそのように仕向けたのだというのだ。**暗殺を決意した佐々木等は清川を見張った（鉄舟屋敷）が、外出には常に５人の同志を同行しているため襲撃の機会は容易には訪れなかった。**しかし、**４月 13 日になって清川は単身で外出**した。麻布一ノ橋際の上山藩邸内に住む、知人の**金子与三郎と面談するため**である。…略…清川が上山藩邸に入ったことを確認すると彼らはその帰途を待った。」

つまり、通説のように最初から陰謀を巡らし、金子与三郎が清川八郎を上山藩邸に招き入れ、暗殺の手助けに関わったとするなら、刺客たちは何日にもわたって清川が頻繁に出入りしていた「虎尾の会」同志・山岡鉄太郎（鉄舟）の屋敷を見張っている必要はなかったろうと考えられる。菊地明氏はひたすらその**「容易には訪れない襲撃の機会」**を刺客たちは待っていた、と書いているのである。

こんな評価もある。

はげしく生き、熱く思考したしるしの著述の原稿、それをあずける先として八郎は庄内藩ではなく、上山藩の金子与三郎をえらんでいた。**江戸在住の人士という限定をつければ、清川八郎がもっとも尊敬するのは金子だった**のだ。熱い思考の跡が金子によって世にひろまるのを期待したのである。

『清河八郎の明治維新』（高野澄／NHKブックス）より

清川八郎と金子与三郎は、これまでみてきたように両者の思想、状況証拠双方から見て、むしろ**同志的な関係**にあったと考えられ、**関与を断定できる根拠は稀薄**であると言わざるを得ない。

◎ 考察を終え、異論噴出覚悟の…私感

幕府要人の多くは海外の書物を読み、加えて豊富な海外情報を長崎出島のオランダ商館より得て「風説書」や「別段風説書」に蓄積していた。一方、上山藩士の金子与三郎が学問を積み、広範な知識を持ち合わせていた優秀な人物とは言え、また全国の志士たちと交流していたとしても、メタ認知能力を何処まで有していた人物かは疑問である。そのような当時の状況を考えれば、金子与三郎にさえ地域に規定された視野の限界も当然あったのではなかろうか。とりわけ山田安五郎への手紙を読むにつけ、幕府の進めていた近代化ヴィジョンの全貌、また海外列強の国力・火力に関しても、それを充分に理解することが出来ていなかったように思われてならない。金子の資質ではなく時代的な状況として押さえておく必要を感じる。